



論語

にわうめの花

吉永 彩霞

Yoshinaga Saika

『Boon-gate』のPDF作品を ご覧いただく前に…

操作について

- 作品の多くは「もくじ」のページで、進みたいページの項目を押せば、そのページまでジャンプし、また、ジャンプしたページのタイトルを押せば、目次のページに戻るよう設定しております。
- 直前に開いていたページに戻るには、画面上の「◀」ボタンで、直前に開いていたページに戻ります。

読み方いろいろ

- 通常は画面の「倍率」が100%前後になっていますが、「倍率」を150%まで高めると文字が読みやすい大きさになります。
- 通常は「見開きページ」で設定されていますが、「単一ページ」にすると読みやすく感じます。
- 読み進めるときは、「十字キー」を使用すると手軽です。
- 「サムネイル機能」を使用して読み進めると、2～3頁からとばし読みするのに便利です。
- 頁を「回転」させることが可能です。地図などを拡大して見るときに便利です。

http://www.bungeisha.com/PDF_is/05-top1.html でPDF作品についての説明を致しております。ご参照ください。

論語
にわうめの花

吉永 彩霞

Yoshinaga Saika

はじめに

礼節の色いちだんとあざやかな小島があり、人びとは毎日、感謝の念で朝日を拝み、夕日を見送っていました。ある日、ピカピカの一艘の船が、岸に悠然と、そのハイカラな姿を浮かべたときのことです。思わずみんなは、われもわれもと探検に出かけました。ところがふと気づくと、帆はふくらみ、論語ばなれの風潮にどうやら乗ってしまっていたようです。そしてやがて、他人に厳しく、自分にはとても寛容な国へと、勢いよく波をけりはじめていたのです。

——なぜか、そんな気もしないでもない昨今のようにあります。

わたくしにとつての論語、それは中学生になってほんのまだ間もないころ、白いセーラー服に、陽は早くも夏に疲れたにぶい光を落とすはじめた、とある放課後のことでした。

担任の先生が、

「これはわたしが目をとおして古いんだけど、どう？ いちど読んでみない？」

そういつて手渡してくださいだったのが、『論語』と、それからもう一冊、樋口一葉の『たけくらべ』でした。論語というものに接した、これがはじめでした。

赤い線をてんと増やしながらも、それでも『たけくらべ』のほうは、どうにか終りまでページをめくることができたように記憶しています。ですが『論語』は、だめでした。ほんの

ちよこつと読み進んだだけで、先生に申しわけないなあ、ただその思いだけ尾に残してちよん切れた、まるでトンボでした。

ところでその『論語』は、古いにしへの御世みよよりずっと今日こんにちまでわたくしたち日本人の日常の行いのそここにまで、少なからず浸透しつづけてきたようでした。ですが、学校で習ったただけではなく、はじめから終りまで、全体をとおしていったいどのようにおさめられているのか、ぜひとも一度はあるがままの姿で、わたくしたちみんなが、——その思いはなぜかふつくらと風船のようにふくらみ続けたのでした。そして今きょうとうとう、はじけんばかりになってしまいました。そしてまた、あたら時ときを過した今日きょうという日までの、自身の反省をもちろんふくめまして、学者でもなんでもない身がこのようなおこがましいことをするそのことをまず、おゆるしただけですしょうか。

『論語』は、二十篇から成っています。しかし、誰によって書かれたのかはよくわかっていません。おそらく孔子の死後、弟子たちの書き置いたメモが、一つ二つと持ち寄られ、そのまた弟子たちによって、やがては一冊のものにとのえられたのではなからうか、そんなふうにいわれています。ですから内容は、一章ずつ、ほとんどばらばらです。わたくしたちがいま目にするようなものにまとまったのも、おそらくは最初からではなく、まん中の郷きょう党とう篇あたりで一度できあがって、そののちまた一、二度つけくわえられ、そして、ようやく今日こんにちの形になっ

たのだろうといわれます。題名も、それぞれの篇の、いちばんはじめの二文字か三文字をとってつけられています。ですからとくべつ、これといった意味はありません。孔子や門人たちの会話もまた、年代を追って、そのとおりに順序よく整理されていったものでもありません。

一字一句、原文にできるだけ忠実に。でも時には、いやく意訳に飛んで。わかりにくいところは、ことばのいくつかを補い。また、漢字も、できるだけ使わないようにして。お若い方をもふくめて、おじいちゃま、おばあちゃま、ご家族のみなさまでじゅうぶん楽しくご理解いただけますように、話しことばの、ごくごくやさしい文字に置きかえてみました。

これをはじめるにあたりまして、諸先生がたの著書のかずかずを開かせていただき、こころいっぱい、できるだけのことを学ばせていただきました。まごころをこめて、ここにあらためてお礼を申しのべさせていたただきたいとおもいます。ほんとうに、ありがとうございます。

田岡佐代治『和譯史記列傳』（玄黄社、一九二一）

洪沢栄一『論語講義』（講談社、一九七七）

武内義雄『論語之研究』（岩波書店、一九七二）

吉田賢抗『論語』（新釈漢文大系、明治書院、一九六〇）

『史記』（新釈漢文大系、明治書院、一九七九）

宇野哲人『論語』（明徳出版社、一九六七）

吉川幸次郎『論語』（朝日新聞社、一九七八）

清田 清『孔子家語』（明德出版社、一九七二）

諸橋轍次『論語の講義』（大修館書店、一九七三）

貝塚茂樹『論語』（中央公論社、一九七三）

金谷 治『論語』（岩波書店、一九八二）

なお、十年近くの歳月をかけ全文を訳し、思いを綴りましたが、上梓に当たっては紙幅の
関係もあり、抄訳とせざるを得ませんでしたことをおことわりいたします。

もくじ

はじめに…………… 3

孔子の一生のあらまし…………… 9

一、学 <small>がく</small> 而 <small>じ</small>	13
二、為 <small>い</small> 政 <small>せい</small>	25
三、八 <small>はち</small> 佾 <small>いつ</small>	36
四、里 <small>り</small> 仁 <small>じん</small>	46
五、公 <small>こう</small> 治 <small>ち</small> 長 <small>ちやう</small>	53
六、雍 <small>よう</small> 也 <small>や</small>	69
七、述 <small>じゆつ</small> 而 <small>じ</small>	82
八、泰 <small>たい</small> 伯 <small>はく</small>	95
九、子 <small>し</small> 罕 <small>かん</small>	110
十、郷 <small>きやう</small> 党 <small>とう</small>	118

二十、	十九、	十八、	十七、	十六、	十五、	十四、	十三、	十二、	十一、
堯 <small>ぎょう</small>	子 <small>し</small>	微 <small>び</small>	陽 <small>よう</small>	季 <small>き</small>	衛 <small>えい</small>	憲 <small>けん</small>	子 <small>し</small>	顔 <small>がん</small>	先 <small>せん</small>
日 <small>えつ</small>	張 <small>ちやう</small>	子 <small>し</small>	貨 <small>か</small>	氏 <small>し</small>	靈 <small>れい</small>	問 <small>もん</small>	路 <small>ろ</small>	淵 <small>えん</small>	進 <small>しん</small>
.....
261	252	240	223	215	199	177	164	147	132

孔子が亡くなったとき
.....
266

おわりに
.....
284

孔子の一生のあらまし

孔子は、今からおよそ二千五百年前、中国の周しゅうという時代に、魯ろの国の、陬そう邑ゆうの地に生れました。

当時の世の中は、非常に混乱していました。

国の代表者たる天子から土地を受け、そこを支配する権利を得ていた諸侯しよこう（大名）たちでしたが、いつしか思いおもいに独立しはじめたのでした。そして、相争あひまうようになりました。

当初、およそ千八百をもかぞえていた小さな国々は、あれよあれよのまに百四十ほどに。やがて、孔子が世に在るころには、強大国とよばれるものは、すでに十をほんのわずかに出ただけの数に生れかわっていました。

しかし、そうやって大きく残った中でも、実際に権力をにぎっていたのは、諸侯しよこうよりもむしろ、その下の大夫たいふ（家老かろう）だった時代で、周王室の権力は、もはや周という一地方で政治を行うだけのものにすぎませんでした。

ところで、三歳のとき父を亡なくした孔子は、貧困の中、先生につくこともかなわず、ほとんど独学でした。身長は、なみはずれており、人はみなめずらしかって、誰たれいうともなく、長ちやう

人とあだながついたほどです。

十九歳で結婚し、翌年、長男をもうけました。二十歳にしてはじめて、役人になりました。

最初はず、倉庫で出納の仕事を。そして、年を新しくして、牛馬などの飼育係をつとめましたが、枿のはかりかたは常に公平であり、動物たちもまた、すくすくとよく繁殖しました。

母は、おそらく、孔子二十三、四歳のころ没したのでしよう。

三十四歳のとき、学問を身につけようと、当時の都、洛邑（洛陽）へはるばる赴いたので、その帰国を期に、彼のもとで学びたいという人の数はいちだんと増えました。

そして、三十五歳のときでした。そもそもは大夫たちが鬪鶏をしてあそぶうち、ことは遊びですまなくなつて、いざごきはついに魯の君、昭公が軍を率いるまでに発展してしまいました。すなわち当時、魯でたいへんな権勢をほこつていた、孟孫、叔孫、季孫の三大夫と交戦するにいたりました。結果、昭公は敗れ、齊国に奔り、しばらくしてのち魯も乱れを見せはじめたために、ひとまず孔子も、齊へ遠ざかることにしました。

そして、また七年。

昭公が薨逝し、それを機会に、孔子は魯に帰つたのでした。ところが、前にも増して評判はますますはるか遠方にまで達し、我れもわれもと、門人になることを乞うてやってきました。時を移し、五十一歳のとき。

魯の君、定公に用いられ、中都（地名）の宰（代官）となりました。

続いて、司空（土地、人民のことをつかさどる、周代に六つあった官職の一つ）に。

やがては、大司寇（司法をつかさどった官）となり、おおいに腕前を發揮しました。たとえば、定公十年の春には、隣国の齊と和睦が成っています。その齊はまた、孔子起用でおそれをなしてか、いつそうの和をのぞんで、「夾谷（齊の地名）にて、君と会せん」と、その夏、使者を遣わしました。このときも孔子は、定公をよく補佐して、事をみごとに運んだのでした。そのため齊侯は、終了後、「会の途中にての非礼をお許しあれ」と、かつて齊が侵略していた魯の地を返還して、謝罪しています。

それからまた時を経ること、三年。

魯公にふたたび実権を取りもどしてもらうべく、孔子は、僭越な三氏（孟孫、叔孫、季孫）の所有地の、城壁の取りこわしにかかったのです。しかし、残り一つが難航し、目的は、残念ながらはたすことはできませんでした。

しかしながら、その翌年。

大司寇をつとめるかたわら、宰相をも輔ける身となりました。ことにこの就任後、魯は、これまでになくみごとに治まりました。齊は、ますます孔子を恐れるようになり、重ねて、魯が覇者となることをなによりも懸念して、いくたびか談合が持たれたのでした。結論として、孔子のすることを阻止しようとして、まずは国中の美女、八十人を選び出し、目もあやに着飾ら

せ、しなやかな舞いをまわせ、合わせて、これもみごとにきらびやかに飾った馬、百二十頭を魯に贈ってきました。

政務はとどこおり、また、そのほか孔子を失望させるに足る因もあつてか、ついに孔子は、魯を断念したのでした。五十六歳のときでした。

それからの孔子は、数人の弟子を従え、諸国を歴訪することおよそ十四年、政治の相談を受けたら、あるいは考えを説きながら教化につとめたのでした。

しかし、努力の甲斐なく、また、誰にも用いられることのないままに、六十八歳のときでしたが、ふたたび祖国、魯に帰ってきました。

帰国してのちは、『春秋』（魯の歴史を記録したもの）に手直しをしたり、多くの詩を整理して、『詩経』という一冊にまとめるなどの日を送るかたわら、その数、三千ともいわれる門人の教育に心血をそそぎました。

ところがその間にも、長男に先立たれ。そればかりか、たいへんに有望視していた弟子の顔回の死にも遭い。あるいはこころ淋しいままに、やがて、七十三年のたぐいなき生涯を閉じたのでした。

そのなきがらは、たぐいなき人の名残りの中、町のすぐそばを流れる泗水のほとりに、手あつく葬られました（『史記』より）。

一、学がく而じ

子曰く、学まなびて時ときに之これを習ならう、亦また説よろこばしからずや。朋とも有り遠えん方ぼうより来きたる、亦また樂たのしからずや。
人ひと知しらずして慍うらみず、亦また君子くんしならずや。

孔子が、おっしゃいました（以下、孔子の言についてはこれを省略いたします）。

「勉強して、わずかな時間をこしらえてはまた、もういっぺん見なおして。これをくり返しくり返し、なんべんもやっているうちには、いつのまにか自分のものになってしつかりと身についてゆく——、これはやっぱりひじょうに嬉しいものよ、そうである。

そうやってこつこつと勉強していれば、しぜんに伝わってゆくのか、遠い国からでも、人がひよっこり訪たずねてくれ、いっしょに学問について、語り合ったり学んだり——、これもまたじつに、楽しいことではなからうかの。

そのうちには、いっぱしの人間としてできてゆくわけだが——、誰も、みとめてくれないからといって、腹を立てたり世間をうらむこともなし——、ほんにこれが、りっぱな人間である
と、こう言えるのではないかの」

◎ 〈論語を以て最上さいじょう至極しごく宇宙ちゆうう第一だいいちの書しよと為なす〉——。
クリスチャンにとっては、聖書が、ほかのどんな書物よりもいちばんでしょう。でも、その

クリスチャンでなくても、《論語が世界中で一番の書》とは、なんだかドキツとしますね。これは、江戸時代はじめの、伊藤仁斎じんさいの著あわした『論語古義こぎ』の《序》に見える文です。そしてなおページを目で追って、この第一篇第一章まで来ますと、《小論語》という、三文字に出くわします。

ですからこの章は、彼も言うように、いわば『論語』一冊のまとめともいえるものなのでしょう。孔子が若いころから日夜、はぐくんでこられたご自身の姿を、追憶をまじえてある日ふと、弟子たちにおっしゃったものとみえます。

有子ゆうし曰く、其の人と為りや孝弟こうていにして、上を犯すことを好む者は鮮すくなし。上を犯すことを好まずして乱らんを作すことを好む者は、未だ之有らざるなり。君子は本を務む。本立ちて道生ず。孝弟は、其れ仁の本為るか。

有子ゆうしが言いました。

「親には心から孝をつくすし、兄弟ともいつも変わらず仲よく——、こういう人間で、目上にたいて、口ごたえや反抗する者はほとんどなからう。それからまた、目上にさからうのを好まない者が、わけのわからないさわぎをおこして世間をさわがすとか、いまだかつてそういうこともなかったし。だいたい君子は、ものごとの根底にいちばん力を入れるのよ。この礎いしずえさえしっかりしておれば、あとは、しぜんに積みあがるであらうし。けつきよく、親には孝。兄の

意見には素直にしたがつて、弟にもやさしく——、これがそもそも、仁の基本ではないだろうか」

○君子くんし論語には、君子くんしということばが処々しよしよに見られます。一つには、高位高官をいいます。しかしここでは、もっとも一般的な、心こころを養い、人としてしなければならぬ正しいことを身をもつて実行している、りっぱな人ひとの意になります。

○仁にんは、すべての人に愛をもつて接する心こころとでもいいたしうか、広い大きい愛のことをいいます。その仁にんの心こころを持った人のことを、仁者にんしや（以後たびたび出てきます。ジンジャではなく、正しくは「ジンシャ」）とよびます。孔子はその仁者にんしやを、聖人に次いで、人間の最も崇高な姿だとされています。

*有子ゆうし孔子の弟子。姓が有ゆう、名が若じやくなので、ほんとうは有若ゆうじやくといいますが、学問、人物、共にすぐれた人にたいしては、尊敬の意をこめて、子しをもつてよぶことがあります。このほか論語の中では、曾子そうし、冉子ぜんし、閔子びんしの合わせて四人が尊称されています。このことから、あるいは論語は、この人たちの弟子によって編まれたのではなからうか、といった意見も出てくるわけです。しかし、そうばかりもいえないようです。有若はまた、容貌が孔子にひじょうによく似ていました。

子曰しひわく、巧言令色こうげんれいしよく、鮮すくないかな仁にん。

「ほんの口の先で、じょうずに人の心をつかんでみたり。笑顔をこしらえて、なにかと、うま

途中省略

本編はダウンロード時間短縮のため省略版でお届けしています。
途中省略なしの完全版をご希望の方は製品版をご「購読」ください。

著者プロフィール

吉永 彩霞 (よしなが さいか)

日本航空株(客室乗務員)を退社後、結婚。

ECC高等英語専門学院の教科書執筆。

続いて、同校スチュワーデスエアライン科講師。

のち、女子社員研修インストラクトレス。

現在は、専業主婦。奈良県在住

論語 にわうめの花

2004年 3月15日 電子出版発行

著 者 吉永 彩霞

発 行 者 瓜谷 綱延

発 行 所 株式会社文芸社

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1

電話 03-5369-3060 (編集)

03-5369-2299 (販売)

<http://www.boon-gate.com>

© Saika Yoshinaga 2004 Corded in Japan

ISBN4-8355-6610-6 C0095

(文芸社発行の通常書籍(紙の本)については、全国書店でお尋ねいただくか、「文芸社ON-LINE」
サイト、<http://www.bungeisha.co.jp>を御参照ください。)

新 04.02.12 Y.H.